



南島原の宝物を世界の宝物に

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」

12の構成資産を地域ごとに紹介しています

第5回 野崎島の集落跡(北松浦郡小値賀町)

18世紀の終わりになると、外海地域の人口が増加し、五島列島などへ開拓移住が行われました。

開拓移住者の中には潜伏キリシタンが多く含まれており、移住にあたっては、藩の再開発地(黒島の集落：第4回で紹介)、や未開発の地(久賀島の集落)、神道の聖地(野崎島の集落跡)、病人の療養地(頭ヶ島の集落)など、既存の社会や宗教との折り合いのつけ方を考慮して移住先が選ばれました。



野崎島の集落跡

野崎島は、五島列島の北部、小値賀島東沖に位置します。704年、この島に小値賀本島の地ノ神嶋神社と向かい合う形で沖ノ神嶋神社が建てられ、この神社に格式高い神が祀られたため、五島一円に氏子が広がり崇敬されました。

野崎島の集落跡は、19世紀以降に潜伏キリシタンが神道の聖地へと移住することにより、自らのかたちで信仰を続けた集落の遺跡です。外海地域から海を渡った潜伏キリシタンは、五島列島一円から崇敬を集めていた沖ノ神嶋神社の神官と、氏子の居住地のほかは未開拓地となっていた野崎島の中央部と南部の2箇所に移住し、神社の氏子となることにより在来の神道への信仰を装いながら指導者を置き、自らの信仰を続けました。解禁後にカトリックへと復帰し、2つの集落のそれぞれに教会堂を建て、その伝統は終わりを迎えました。

教会見学に当たってのお願い

教会堂は「祈りの場」ですので、見学マナーを守り、厳粛な雰囲気の中で心静かに過ごしてください。教会行事(ミサ、葬儀等)により見学できない場合や、一度に多くの見学者を受け入れられない場合もあるため、見学を希望される際には【事前連絡】をお願いします。



旧野首教会

1908年に建設された煉瓦造り(英国積み)の教会堂です。ヨーロッパ人宣教師に直接指導を受けた、日本の伝統的な木造工法を熟知した日本人大工によって設計・施行されており、東西の技術的融合を示しています。

※集落内の教会堂を見学する場合は、「おぢかアイランドツーリズム協会」へ事前の連絡をお願いします。

施設紹介

野崎島ビジターセンター

平成29年4月にオープン。野崎島の自然環境や歴史・文化に関する展示、待合所や物産品の販売コーナーなどがあります。

- 住所：北松浦郡小値賀町野崎郷192番地(野崎港船着き場前)
- 電話：0959-56-2244
- 営業時間：午前8時15分～午後3時
- 休館：町営交通船「はまゆう」の運休日(原則、第1・第3日曜日)

おぢかアイランドツーリズム

住所：北松浦郡小値賀町笛吹郷2791-13
小値賀港ターミナル内

電話：0959-56-2646

小値賀島の公式ホームページ

おぢか島旅

検索



「家族といっしょににじの橋」
宮崎 美月さん(小林小2年)作

三県架橋の 必要性をアピール

12月17日、本市口之津町から熊本県天草市、鹿児島県長島町に至る三県架橋の実現を目指し、「島原・天草・長島架橋構想及び九州西岸軸推進地方大会」が鹿児島県出水市で開催され、三県の関係者約500人が出席しました。

この両構想が実現し、移動時間が短縮することで、県境を越えた相互交流を可能にし、地震などの災害が発生した場合の避難や災害物資輸送の代替道路としての機能が期待されます。

市としてもこの両構想の早期実現に向け、関係各県・市町と一体となって引き続き、国へ要望を行っているところです。

また、大会の一環として小・中学生を対象に実施された絵画コンクールでは、宮崎美月さんの作品が見事、長崎県における最優秀賞に輝きました。おめでとうございます。

いつまでもお元気で

～100歳おめでとうございます～



苑田 武士さん(有家町)
大正7年1月10日生まれ

伊藤 重成さん(有家町)
大正6年12月30日生まれ

Focus in 南島原

まちの話題



日ごろの英語学習の成果を披露



1月5日、西有家総合学習センターカムスで、「平成29年度南島原市中学生英語暗唱大会」を開催しました。

各中学校を代表して、総勢16人の生徒が出場し、日ごろ培ってきた学習の成果を堂々と発表しました。

最優秀賞には、加津佐中学校3年の中島幸咲奈さんが選ばれ、2月3日に大村市中央公民館で開催される県大会に本市の代表として出場します。



韓国の学生と深江中が交流



1月10日、韓国の青少年連盟の学生旅行団が南島原市を訪れ、深江中学校の1・2年生、141人と学校交流を行いました。

韓国青少年連盟団のキム ジソプさんは「お互いの文化の違いにふれながら親睦を深めたい。ぜひ韓国にもきてほしい。」と話しました。

その後の交流行事では、深江中学校吹奏楽部による演奏やゲーム交流などが行われ、言葉がうまく伝わらない中でも、生徒たちなりに積極的にコミュニケーションをとってお互いの文化の違いを体感しながら親睦を深めました。